

今日の小児治療指針 第17版

水口 雅, 市橋 光, 崎山 弘, 伊藤秀一 ● 総編集

〔評者〕内海裕美(吉村小児科院長)

本書は、1980年(昭和55年)に卒業した評者にはなじみ深いものである。研修医、勤務医であったころには、病院、出張先の外来などで治療に役立てていた必需品であり、開業22年を迎えた私は第16版を機会あるごとに活用している。今回の第17版は28章716項目のエキスパートによる書き下ろしであり、「子ども虐待と小児科医の役割」と新たな章の記載があり、小児科関連のガイドライン、小児科医に有用なウェブサイトURLなどの資料も充実している。

本書は、診断後に治療指針を調べる、確認するのに役立つ簡便さが売りである。それだけでなく以下の特徴があることを知ってほしい。

- 1) 目次を一覧すると小児医療の扱う疾患の多さを把握することができる。特に若い先生方には、「20章 小児保健」「21章 学校保健」を読んでいただきたい。
- 2) 第1章の救急医療では、一般外来でも遭遇するものまで含まれている。心の問題も低年齢化してきており、希死念慮、拒食などへの対応も参考になる。
- 3) 第2章では治療手技が文章化されているので、確認、実施積み重ね、確認と手技の研さんに活用できる。
- 4) 第3章では、小児診療にあたっての心構え、基本、年齢別特徴、子どもへの説明、障害のある子ども、小児科領域の医薬

品の特性、病診(診療)連携、外来の工夫、患者教育のノウハウ、エラーとニアミスについてのエッセンスがまとめられている。基本であるが一朝一夕には獲得できない重要部分であろう『保護者が納得! 小児科外来匠の伝え方』(医学書院、2017)なども併読されたい。

- 5) 各疾患についても、日常診療で遭遇する機会の多いものについてはおよそこの治療指針で足りると思われる。専門性の高いものについても治療の概要を知ることができるので、患者、患者家族への説明に役立つ。
- 6) ガイドライン一覧の資料だけでなく、各領域にガイドラインの存在が記載されている。
- 7) 処方内容が具体的でわかりやすい。
- 8) 小児科医は「子どもの総合診療医」である。皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科・口腔外科、整形外科疾患などの概要、治療などにも触れられており、診療、病診連携・診療連携に役立つ。
- 9) 小児科医は地域の医療資源である。小児在宅医療のニーズが高まる中、積極的に取り組まねばならない領域となっている。どこの場所にいる、どんな子どもでも小児医療の対象であるという理念が貫かれていることがうかがえる。
- 10) 子どもの虐待が独立した章として取り上げられた意義は大きい。個人的には、世相を反映し



て第1章に位置しても妥当だと考えている。どんな疾患でもどんな家族でも虐待の存在は常に鑑別疾患として念頭に置き、その扱い方も熟知しておく必要がある。知識だけでなく実践を積み重ねることが大事な分野である。

最後に、書評を依頼され、初版時の序、第17版の序から最後の学校生活管理指導表まで全部目を通した。機会あるごとに必要と思われるときに利用していたが、通読する価値のある本だと気付かされた。ぜひ通読していただき、その上で機会あるごとに開いてほしい。

A5・1010頁

2020年12月

定価: 本体16,000円+税

[ISBN978-4-260-03946-8]

医学書院刊